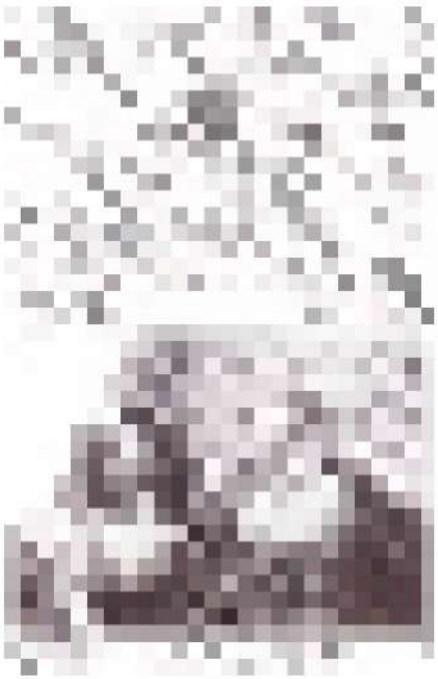
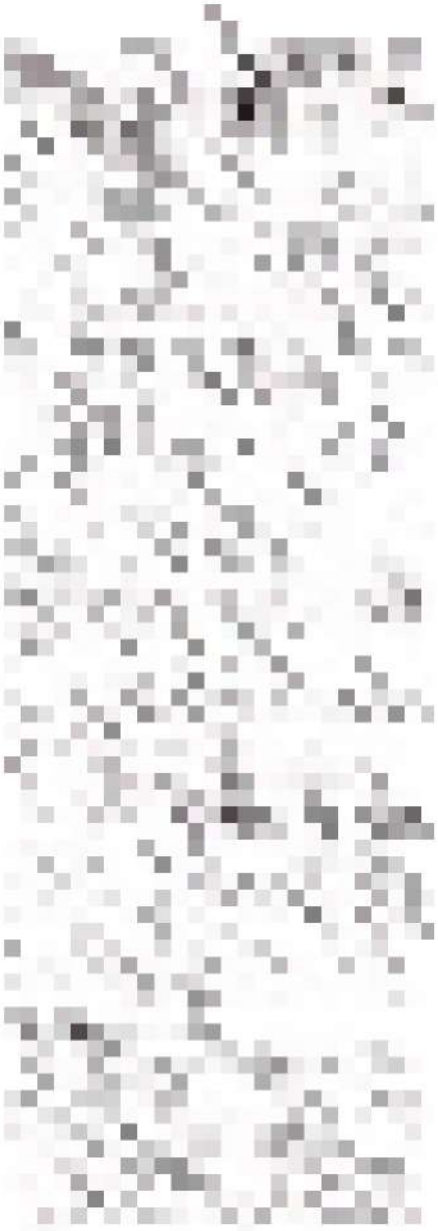
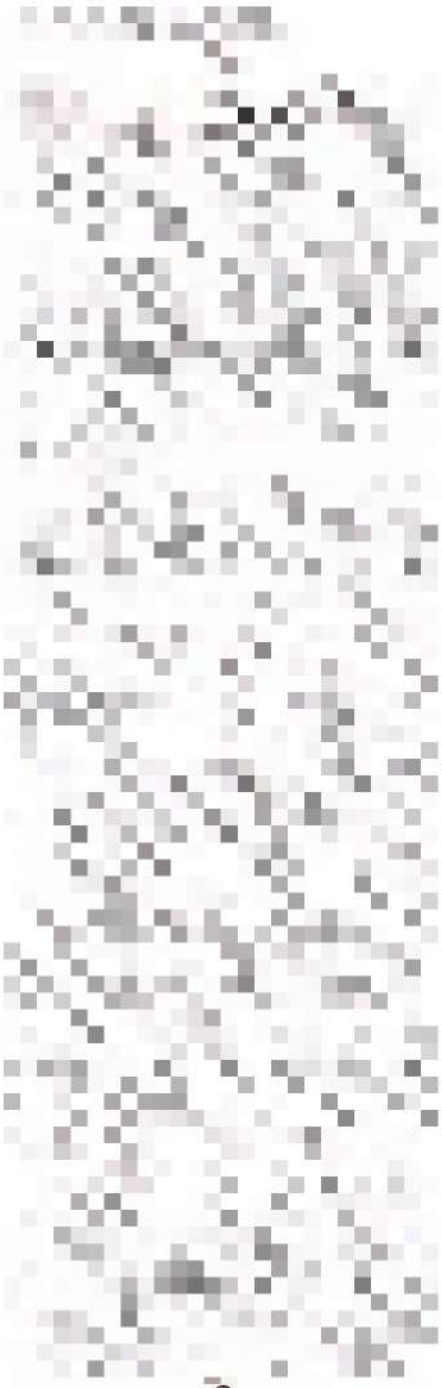




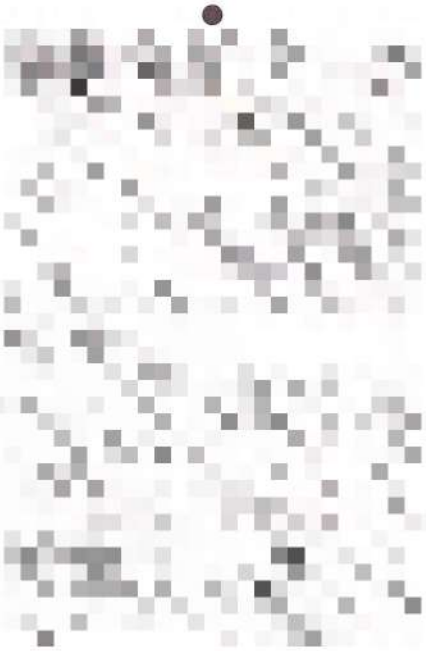


## Opera チューリヒ歌劇場《マリア・ストゥアルダ》でダムラウが初題名役

チューリヒ歌劇場でもヴェルディ《リゴレット》や同《椿姫》、リーダーアーベント等で着々とファンを増やしているディアナ・ダムラウが、当劇場のアンドレアス・ホモキ総裁に「題名役デビューをぜひこの劇場で」と提案し、実現したというドニゼッティ《マリア・ストゥアルダ》が、4月8日に初日を迎えた。

ロベルト役のパヴォル・ブレスリクが、前の週からの風邪で歌えていなかったり、エリザベス1世役のセレーナ・ファルノッキア以外は全員が初役という不安を抱えての開演となった。

ブレスリクの声は、第1幕のアリア終結部で、高音がほとんど声になっていなかった以外は、問題がなかった。すべてが合格点ではあるが、第1幕では何か麻酔がかかったような鈍さがあった。指揮者エンリケ・マッツォーラの音楽作りは、ミラノ・スカラ座で指揮した父を持つだけあって正統派なのだが、オーケストラを鳴らし過ぎて、細かい音符の振り分けなどで歌手に寄り添っていかない。しびれを切らしたようにダムラウが、アリアで牽引し始めたところから、音楽が生き生きと流れ始めた。

ダムラウの夫であるニコラ・テステも美声のタルボを演じ、公私共に妻＝女王を支えていたが、当劇場デビューと初役が重なってか、多少力みが出ていた。アンナ役のハミダ・クリストファーセンが、まろやかな声で脇をしっかり固めていたのは印象的だった。全員が上がり調子で迎えたクライマックス、美しい祈りのシーンを経て、最後はダムラウのピアニッシモが成功を決定的にした。（中 東生）

なんとダムラウを初めとしたキャストのほとんどが初役だった。チューリヒ歌劇場《マリア・ストゥアルダ》から
©Monika Rittershaus